

向こうはどんなところだい
『What's It like out there?』

訊かれたことにきちんと答えるというのは案外むづかしい。

質問をする場合には、たいてい意図がある。その意図にあった回答をすると会話が弾む。会話のキャッチボールというやつだ。これが下手な人間というのは、質問したひとではなく自分の意図に沿って回答してしまっているらしい。らしい、というのはこれはぼくの^{せんせい}教官がぼくの回答を評して言ったことだからだ。

ぼくの^{せんせい}教官は「せんせい」と呼ばれるとすごい嫌な顔をするひとだった。だからぼくは心の中でしか「せんせい」と呼べない。「オートマトンと呼べ」と^{せんせい}教官は口癖のように言った。「私は自動的に羊なのだ」などよくわからないことを言うひとでもあった。けれどぼくにとって「せんせい」は「せんせい」だったからしょうがないし、そう呼びたかった。^{せんせい}教官から色々なことを学ぶ日々は遠い遠い過去のことになってしまっているけれど、まだ生きているのかなあ。多分生きているかなあ。生きているといいなあ、とぼくは思う。

出発するときのことを思い出した。ぼくと^{せんせい}教官は向かい合ってパイプ椅子に座っている。きしきしと音を立てる古い備品の椅子は、出発するときに使われる。一度座って、お互いの顔を見て、再び立つ。それがお別れの儀式。

^{せんせい}教官はぼくの顔をじっと見て言った。

「ひとつ宿題を出そうと思う」

ぼくは黙ってうなずいた。

「『向こうはどんなところだい?』 この質問に答えを用意しておくように。帰ってくるまでにな」

わかりました、と意をこめてぼくはうなずき、ありがとうございます、と頭を下げた。

Scene / 01

ゆっくりと意識が覚醒していく。それと同時にぼんやりと何かが呟いている。

.....意識レベルの上昇を確認。モードを から へ。深組織を再起動。セルフチェック開始。
A 4 から C 5 まで薬剤投入。劣化管の修復開始。第二次凍結解除まで残時間を表示.....

途切れがちな意識が像を結ぶ。凍結管からの目覚めを例えるのに一番近いのは、めがねを掛けているひとの視力検査のようなものだ。わかるかな。目が悪いひとにしかわからないかもしれない。だんだんレンズの設定が変わっていてもやもやが形を取っていくみたいな、そんな感じ。凍結管はその名前のおり円筒形をしていて、ぼくはゲル状物質に埋め込まれている。肺と言わず胃と言わずそのゼリーはみっしりとぼくのからだに入っている。冗談かと思うほど毒々しい七色のゼリーは栄養素やら薬剤やらに対応していると言うけれど、虹という商標名は ^{スターボウ} いささか誇大すぎるようにも思う。第一スターボウは七色じゃない。三万五千六百二十二色ぐらいあると思う。主観的な、という意味で。

凍結解除までまだ時間がある。

七時間ぐらいかかってようやく解凍されるわけだけど、それまでぼくは何もすることがない。とはいえ、意識が覚醒した、ということは業務日誌の参照および起票が可能な状態になったということだった。なので前回のログを辿る。

『ノースリー。現状変化なし。本社及び支店からの連絡なし。累積業務時間警告を確認。凍結睡眠を開始する。

次は記念の13回目の夏だ。お祝いをする。おやすみなさい。良い夢を。

夏、というのは凍結管から出ること、と覚えてもらってかまわない。

惑星上における冬というものは寒いものらしい。凍結から開放されることは「寒くなる」わけだから、夏になる。だからつまり、凍結管の蓋は夏への扉というわけだ。凍結管の名前の由来。

ぼくは13回目の夏を迎えることになる。

前回の自分がどうして次回を記念すべき、と考えたのかはよくわからなかった。ログを辿ってみても、延々と『ノースリー』が並んでいるだけだ。目覚めが常に喜ばしいからとでも思ったのだろう。そんなことを考えながら、まったく変化のないログをぼくはずっと眺め続けた。

気が付くと薄いクリーム色の天井　これは便宜上の表現だ　が視界に入った。素肌の背中ごとにごわごわで少し埃っぽいシートを感じる。洗い立てのシートを希望したいところだ。水は節約しないといけないからそんなことは贅沢だけど。凍結管は床に埋め込まれる形で収納されていた。曇りガラスの上には『メンテナンス中』と表示されている。

ぴ、ぴぴ。

サイドベッドにあるアラームチャイムが鳴った。

のどになんとなく圧迫感がある。手を何気なく動かして当てた。ゼリーの欠片がついていることもある。寝転がったまま天井を見ていると、色々な感覚が戻ってきていることを実感する。例えば電子機械がうなりをあげるとともに香る匂いや再び循環し始めた合成酸素の匂いとかそんなもののおかげで。

目を閉じ、こめかみに指を当てる。船内ルーターからのデータが脳裏に流れ込む。

「ん……」

ノースリー・マーチを読み終えたぼくはかすかに息をついた。

「^さ菟、透明度を最高に。周辺光線を保護表示」

ベッドがあるだけの覚醒室はあっというまに宇宙空間を360度上下左右に映し出した。

見慣れた星々が見える。見える、とは言っても実際問題はどの恒星も今いる場所からはずっと離れていて小さいから肉眼では全部見えない。この光景は電子機械が捉えたものだ。

記念すべき13回目の夏はほんとうにいつもどおりだった。

ぼくは仕事をはじめることにした。

「こちら社員番号X19/600/72/8号。拠点社員権限によりデータベース接続を要求する。承認を確認。ログ開始。標準歴設定。えーと.....『昨日』が11月2日だったから...11月3日。船内時間午前10時。業務を開始する」

菟巻は『深遠なる虚空』と表示してきた。

「ありがとう、菟巻」

ぼくはお礼を言った。とはいっても、菟巻は船内環境を維持・管理するためのシステム(というよりこの定点観測船そのもの)にすぎなくて、教官せんせいみたいな会話相手にはなれない。あくまで定型的な応答ができるだけだ。お礼を言ったところで、どういたしまして、なんて返す「人間的な」機能はない。それでもお礼を言うのは癖みたいなものだ。だってほら、一人暮らしが長いとさ、独り言が増えるでしょ？ そういう習慣みたいなもの。

こうしてログを採るのは、深宇宙に独りでいると時々耐えられなくなるひとがでてしまうから、なのだそうだ。1級航路定点観測員の中でそんなことになるのは一万人にひとりらしいんだけど。そもそもぼくみたいな定点観測員は一人で生まれ独りで死ぬ。耐えられないひとのほうがとてもとても珍しいレアケース。逆にぼくは航路地図製作業務なんかはできない。あれは色々な星を巡る仕事だから。でもちょっと憧れがなかったかという嘘になる。ぼくだってあの有名なC・Cの話を読んでわくわくしなかったなんて、嘘はつけない。

それでも定点観測員の仕事は嫌いじゃない。

むしろ好き。

ここしばらく.....いや、少なくとも12回夏を繰り返す程度には変化がないけれど、『次回定点連絡指示が未着の場合ハ現在地定点ヲ恒常観測セヨ』が観測員の一番守るべき契約条件なのだ。勝手に観測員が動くことで、一世紀単位でこっちとあっち、あっちとそっちへと往還する恒星艦が遭難でもした日には数百万の人名が失われる。

そこにいて役に立つ夢見たいな職業！

承認欲求満たされまくり、ばんざい！

.....と、言う触れ込みだけれど世間では石ころみたいなものだ。

航路は等級があがればあがるほど人通りが多い。

辺境航路は全て1級航路。

この定点にぼくが派遣された理由は『この星系から観測できる準星クエーサーが何故か移動を開始したように見える』という事象のためだった。航路保安委員会に航路の閉鎖が提案されたけれど、

委員が拒否権を發動し、代わりに観測員の派遣が採択された。

そしてぼくがここにいるのは、たまたまそのときに生み出されたばかりだった、という理由に過ぎない。生まれることに何の意味がないのと同じで、ぼくでなければならなかった理由も、ぼくでしかできない理由なんかでもない。

ただそこにいたから、だけなのだった。

だからこの再生されることのないログも、結局は独り言。

話しているうちにちょっとからだ動かせるようになったみたいだ。

『莢巻、ログを終了する。起きてもいいかな？』

『是』

ぼくはからだを起こした。

Scene / 02

「さて。と」

覚醒室を出るとぼくは首を巡らした。

莢巻はぼくの気配に応じて、電灯をつける。

夏のたびに色々なことを忘れがちなので自分の知識を試してみることにした。

「莢巻、船内マップ表示」

ばば、とホログラムが浮かぶ。

莢巻はカウベルを連想してみるとわかりやすい、と思う。あれの広いほうが前になる。広がっている部分から見て後方には紐みたいに細く長い長い巻がいくつもくっついていて、狭義ではこれが「莢巻」。細長い巻はバサードラムジェットエンジン。それがふたつくっついている。「ブレーキ」と「アクセル」ってぼくは呼んでいる。今は定点にいるために両方とも使っていない。

ぼくはカウベルとエンジンをつなぐ連結点にいる。円筒形になっていて、覚醒室は上室にある。莢巻が表示した船内は、上半分が青く光っていて、起電していることを示している。

ひとつひとつ部屋の名前を確認する。どこに何が置いてあるかをきちんと思い出すことができた。必要のなさそうな場所の電力をカットする。ホログラムに触れるところから赤くなっていく。

「……あれ？」

アップーヤードの不必要な部分を全部停電させたのに、記憶していたよりは消費電力が減らない。

「莢巻、発電機の出力は？」

オールグリーン
『正常値。無問題』

「なんだろう……」

初めてのケースだ。

莢巻は問題ない、って言っているけど……。

「まあいいや……あとで点検しにいこう。それよりお腹が減ったよ」

ぐー、とお腹が鳴った。

……お腹が空いた、と口にしたところで作るのは自分なんだけれど。

莢巻はさすがに食事までは作ってくれないのだった。

「異常なし、こっちも問題なし、と……」

アップーヤードの部屋を全部調べてみたけれど特に問題はなかった。

とすると^{ボトムヤード}下室だろうか？

久しく入っていない。

ずるずると覚醒初日用の栄養ゼリー飲料をストローで口に含みながらぼくは壁を蹴った。ボトムヤードに何か不具合が出ているのであれば、重力を発生させるのは諦めなければならない。連結部分をぐるぐると回して微少重力を発生させるのだけれど、それを制御するフライホイールやモーターエンジンが壊れてて漏電とかしてたらいやだなあ。ジンバルロック（外部観測が困難になってしまう）に陥ると厄介だ。

ボトムヤードは半分がアップーヤードのための装置で埋まっていて、もう半分は倉庫になっている。倉庫は空間観測しているだけでは必要のないものがしまわれている。

「莢巻、倉庫の物品リスト」

『是』

目の前に現われたリストが灰かに光っている。

指でタップしてリストを下へ持っていく。

窒素固定装置、トラロープ、鏡面タイルに……映写フィルム？ 8インチフロッピーディスク五枚……それにLRW2(009GHB)……ってなんだこれ。何に使うんだろう？ あ、

チョコボンボンがある……。フリーズドライっていても賞味期限絶対切れてるよね……。

「やめた」

『……』

莢巻はプロンプト状態で点滅している。

数百のリストを見ているのに飽きた。

「ボトムヤードへ行くよ、莢巻。開いて」

『是』

再び壁を蹴って莢巻が開けてくれたボトムヤードへの通路へ向かう。

薄暗い空間には数個のミニライトの光が軌跡を描いている。

時々ごうんごうん、と音が響いた。

発電機の音だろうか。

その音の合間に微かな軋む音が混じる。

莢巻が連結居住区画をじゅんぐりにチェックしているのだろう。

^{リーク}亀裂があれば修理する必要があるけれど、今のところ莢巻は何も言ってきてはいない。

ボトムヤードの機械室は、前の部屋も後ろの部屋も異常はなかった。

「とすると、倉庫か……」

倉庫の扉をくぐると色々なものがごちゃごちゃと置いてある。そのどれもが紐で固定されているから動いたりはしない。隙間を縫うようにしてぼくは奥へと進む。

^{ワーニン}『警告』

「莢巻？ どうかした？」

『……』

莢巻はプロンプト状態で沈黙した。

莢巻が沈黙するときはその会話が想定されていないか、状況が想定されていないかのどちらかだ。

ぼくは更に問いかけしようとき、ミニライトとは違う光がさらに奥の区画から漏れていることに気がついた。

ミニライトの黄色い光とは違う、蒼白い光だった。

おそろおそろ光源を見る。

薄暗がりの中、ぼう、と青く光るもの。

円錐をふたつくつつけたみたいなその装置はこぼこぼと音を立てていた。

「これ……」

ぺたりと壁に触れる。

それはまるで惑星上の空気をガラスにしたみたいな水色。

暗がりにぽっかりと浮かんだ青空みたいだった。

円筒には太い電源ケーブルが繋がっている。ケーブルは熱を持っていた。

「通電してる。……これか、原因は」

ぐるりと円筒を回してみる。

なんだったっけ、これは。

思い出せない……。

床にはいつくばると、何かコンソールでもないかと探してみた。

コ ス ナ フ
C O S N A V という文字が見える。

コスナフでリストの検索を掛ける。

『該当備品 / ^{インキュベーター}恒温孵卵器』

ふらんき……細胞を培養する恒温装置。

温かい冷蔵庫。ぬるい温飯器。調理には向かない器具。

小型の^{インキュベーター}孵卵器は確かに備品にあるのは知っていたけれど どうしてこれが起動しているの

だろう？

^{せんない}莢巻の物質は循環している。

水や空気は言うに及ばず物質の全てが。

莢巻は閉鎖環境であり、エネルギー収支はプラスマイナスゼロになるようにできている。

とはいえエネルギーは熱といった状態で少しずつ失われるので、太陽光パドル（という名前の外部光線捕捉パネル）を広げることで外部より減った分補給する。^{インキュベーター}孵卵器を使用するためには使われていないエネルギー（or 物質）を展開する必要がある。普通はそんなことをしない。一つの業務が終わったときや、業務が始まる時、お祝いや打ち上げをかねて新鮮な食品になる魚や植物を生み出すために使ったりする。そんなことは長い間していない。

「莢巻、ぼくの体重減ってる？」

『体重 / 44.6 kg』

「……ちょっと減ってるね」

かちんこちに冷凍されるとやっぱりかさが減ってしまう……のだろうな。

昔、莢巻を小さくしたものがダイエット装置として売り出された、とニュースを見たことがある。

「ん——」

ガラスに顔を押しつけて見ても何も無い。

ただこぼこぼと空気の泡が漏れているだけだ。

「莢巻、これで電源落とせる？」

『……』

莢巻は是とも否とも言わなかった。

困惑したかのように沈黙している。

太い電源ケーブルを引っこ抜けばいいのだろうが、注水されたもの（中身はきっと生理食塩水と有機混合物のスープだろう）の処理が大変だ。処理機を探してこなくてはいけない。

「処理機はどこだったかな。多分同じ区画だろう……けど……って」

チュピ！

ふわふわと浮いている「もの」と目があった。

「うわあああっ！」

がたがたっ！

思わず飛び退……こうとしたけれど振り回した腕のせいでくるりとぼくは逆さまになり「それ」を鼻先に押しつけることになった。

チュピピ！

「ななな、なにこれっ」

『検索……該当 / C. tschudii』

「なに、それ？」

『テンジクネズミの一種。ペルー・テンジクネズミと推定。雌』

チュピチュー。

そいつは灰色の毛並みを持っている小動物だった。

額のところが何かの葉っぱがはりついた跡のように白くなっている。

手を差し出すと、手足をばたつかせながら指につかまっている。

『体重 / 400g』

ぼくの戸惑いを察したかのように莢巻が壁面に表示する。

「……そうか。ぼくの『失われた体重』なのか、こいつ」

『…是』

一瞬間があったのは推測にすぎない、という意だろうか。

『是、再投入資源化^{リサイクル可能です}』

チュピー。

手のひらの上で鼻をひくつかせている小さなネズミ。

じんわりと温もりが伝わってくる。

ぼんやりと、ただぼんやりとその温もりをぼくは感じていた。

『……』

視界の片隅でメッセージが点滅する。

『是。再投入資源化^{リサイクル処理しますか}?』

「莢巻。黙ってて」

『是』

ぼくの言葉に、莢巻はメッセージウィンドウを閉じた。

覚醒室の隣にある食堂（兼リビング兼観測室）のテーブル。

チュピー！

ふわふわとテンジクネズミが浮いている。

「ちょっと待っててね」

工具箱を持ってくると、着床テープを取り出す。着床テープはいわゆる面テープ（マジックテープとかベルクロとかいうのかな？）のことで、マグカップやらといった食器や工具、あるいはぼくの履いている靴の裏にもついている。床の一部には起毛されたテープがところどころに貼ってあって、そこで固定する。歩くとペリペリと音がするのが少し間抜けだけど、重力がないからしょうがない。

テンジクネズミの足にテープの輪っかをくっつけて、テーブルに軽く押しつけた。

チュピー。

ペリペリ。

ペリペリ。

ペリペリ。

チュピ。

後ろ足で立ち上がったテンジクネズミは首を傾げた。

「それにしても困ったな。きみはどこからきたの？」

『素材』としてはぼくなのだろうけれど、莢巻の中には生き物のデータはそんなにはないはずだ。データバンクを調べてみる限り、ネズミなんか必要ないだろう。数種の鳥、小魚、植物だったと思ったけれど。

「さてよ。本当にそうなのか？」

データバンクをのぞいてみる。

インキュベーター
孵卵器に紐づけられたデータ。

「……ある。なんで？」

『……』

莢巻は沈黙したままだ。

じっとネズミを見る。

チュピ。

ふいにネズミが前足を動かした。

『是』

「え？」

まるでネズミの前足が何かを指示したかのように、莢巻は何かのデータを表示する。

「通信記録？」

送信元は……ここからずっと遠くの航路からだった。

どこかのステーションからだろうか？

「でも莢巻、ぼくは全部のログをチェックしてたよ？ どうしてこのデータに気がつかなかったんだろ」

チュー。

ぼくがデータウィンドウに近づくと、ネズミも同じように顔を寄せた。

データが読めるのだろうか。

……まさかね。

通信記録は数字の羅列だが、暗号化されたそれを復号すると、確かにネズミのゲノム情報のようだ。

ぼくが目覚めるのと同じようなタイミングで受信が始まっている。

送信元の座標は確かに7級航路の途中からだ。

ただ、航路全図を調べてみたところ、そこには惑星もないし、基地はおろか衛星もないはずだ。

いったん情報は途切れたが、その後再び受信が始まっている。

細かくノイズ混じりではあってもまとまったデータであるのは見て取れた。

「受信が終了するのはいつ？」

『試行... / 168 hours』

7日後か。

インキュベーター

孵卵器のデータを遠隔表示させる。

データを受信し、船内物質を消費して明らかに『何か』を再生しようとしている。

「.....どうしたものかな.....」

正直ぼくには判断がつかなかった。

こんなことは初めてだ。

この状況に対応しなくてはいけないのは確かだけれど、あまりに予想外すぎた。

どこからの通信で勝手にインキュベーター孵卵器が起動する。

消費されているのは酸素、水素、炭素、窒素、塩や鉄分、カルシウムエトセトラエトセトラ。

「英巻、このままだとまずいことになりそうな気がする。インキュベーター孵卵器の通電を強制カットして」

『.....』

英巻はプロンプトを表示したまま点滅している。

「英巻？」

『.....』

フリーズしたかのように英巻はメッセージを表示しない。

あまりに長い間点滅しているのでさすがに心配になってきた。

.....手持ち無沙汰だ。

手に持っていたデータ・スタイラスペンをくるくる回して待ってみる。

『.....』

「英巻、何かトラブルでも.....」

言いかけたぼくはぼとりとペンを落した。

ニエート
『否』

「ちょ、ちょっと待って。拒否！？ どうして」

『....』

英巻はまた沈黙した。

「英巻、インキュベーター 孵卵器への通電をカット」

ニエート
『否』

すげなく英巻は応えた。

どうということだろう？

チュピ。

ぼくの戸惑いなんかお構いなしに、ネズミは鳴き声を上げた。

Scene / 3

「はあ.....っ」

ボトムヤードは暖房の利きが悪い。

倉庫だから断熱材も薄くしか張ってないのかもしれない。

ぼくは毛布にくるまりながらインキュベーター 孵卵器の前に座っていた。

インキュベーター

孵卵器の中身はもやがかかったかのように灰色になっていてうかがうことはできない。

けれどぼくは『何かのデータ』が受信が終了したときからずっとここに釘付けだった。

そうするに至った理由は、ひとつ。

受信終了と同時にインキュベーター 孵卵器の中には一枚のプレートが浮かんでいた。

薄いプラスチックのプレートに、手書きみたいな文字が書き込まれている。

『チンと鳴るまで、扉をあけないでください』

今は液体が曇っていてうっすらとしか見えないが、今もプレートはぷかぷかとインキュベーター 孵卵器の壁際

を漂っている。

何故か眠ることができなくて、眠ったら何かのチャンスを失ってしまいそうで、ぼくはこうして膝を抱えたまま宙に浮いて、^{インキュベーター} 孵卵器を見つめた。毛布の中で時々ネズミがチュピチュピ鳴く。

その温もりを感じながら、かくん、と首が落ちた。

「……う…ん……？」

チン、と。

ひどく涼しげな鈴の音が鳴った。

うとうとしていたぼくは思わず顔を上げる。

^{インキュベーター}
孵卵器の扉が開き。

ごぼっ、と音がして。

「！」

蒼色のゼリーから、真っ白い腕が飛び出た。

「それ」は倒れかかるときのよう^{インキュベーター}に、孵卵器から姿を現した。

真っ白い。

ボトムヤードの薄闇の中、^{インキュベーター} 孵卵器のコンソールが放つ蒼白い光が瞬く。

その光が白さをますます引き立たせた。

ふわりと宙を舞うのは長い茶色の波。

閉じられたひとみがそっと瞬く。

吸い込まれそうな鶯色のひとみ。

「あえ…て…うれし……です
「おーちに・らーと・ぱずなーこみつあ」

白い裸身を腕の中で抱き留める。

か細く、折れそうなくらい華奢で、やわらかく、ちょっとだけひんやりとして、すべすべと
してる。

女の子だった。

「^わに^たゃー・^しざうーと・^りしー^ちか

リシーチカこと、シェーリャの声を聞いたとき、ほんとうの夏が始まったのかもしれないかっ
た。